

令和2年度入学（一般入試）試験問題の出典

盛岡短大部国際文化学科

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	国際文化 学科	西田 治文	自然史 一佳き人、良き社 会への入口	『UP』第541号 東京大学出版会 2017年より pp.6-11	東京大学出 版会

令和2年度 一般入試

短期大学部

小論文 (90分)

学科・専攻名	ページ
生活科学科 生活デザイン専攻	1～2
生活科学科 食物栄養学専攻	3
国際文化学科	4～5

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 志望する学科・専攻により問題並びに解答用紙が異なるので注意下さい。
- 3 この問題冊子は5ページあります。なお、下書き用紙が2枚あります。
- 4 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督員に知らせ下さい。
- 5 解答は、必ず黒鉛筆(シャープペンシルも可)で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 6 解答用紙(各学科・専攻別)には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入下さい。
- 7 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入下さい。
- 8 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 9 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰り下さい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

2枚の写真がある。いずれも、1997年にマダガスカルで行なった植物化石採集調査ついでのものである。1枚は、かつての日本を彷彿させるようなザリガニ豊富な里田に囲まれた村の子供たちで、ひたすら好奇心にあふれたそのまなざしに惹かれる。旺盛な好奇心なくして“佳い人”は育たない、というのが持論である。好奇心があるからこそ他人の動静にも目が向き、配慮にもつながるのである。ひるがえって現代社会にあふれる無関心は、好奇心の欠如にも一因があるのではとさえ考えたくなる。

SDGs (Sustainable Development Goals) 注1 という表現が使われ始めた。行政もようやく次世代のことを考え始めたかと好意的に見たいところだが、これを「持続可能な開発目標」と訳したのは気に入らない。地球の資源は限られ、水や大気の質と循環にも異常が生じている。このため人類の生存に不可欠な生物生産、重要な部分に絞っていえば“毎日の食べ物”の安定供給さえ脅かされ始めている。そういう現実を素直に見れば、いまさら「開発」はないだろう。心ある人たちはずっと、「発展」と訳すべきだと主張してきたが、くだんの表現を見ると、日本が目指す持続性とはいまだに、ヒトがひたすら続けてきた自然からの収奪と成長経済という図式から抜け出せずにいることがわかる。約20万年というヒトの歴史を突き詰めると、資源の奪い合いの繰り返しに見える。1次資源として消費する自然界の生き物、農・工業と生活に用いる水、近代経済において儲けにつながるありとあらゆる資源などの収奪争いは、人口の増加に伴って加速してきた。最初は地域集団や部族間の争いから、地方領主間へ、今や国家や同盟国間へと拡大した。しかも、その争いはほとんど武器によって決せられている。しかし、地球の許容量は限られている。国がひしめき合い地球全体にこの収奪がおよぶようになった現在、人類が目指すべきなのは争いではなく共存であろう。武器の質争いは加速を続け、もはやたがいにそれを使えば生物多様性注2と生態系は取り返しのつかない破壊を被り、ただちに人類全体の存続が脅かされるレベルにまで到達した。これからの国家が投資すべきは、いかに地球の資源と環境を良好な状態に保ち、持続的に共同利用するかという方向ではないだろうか。マダガスカルのもう1枚は、バオバブ回廊で有名なムルンダバの小さな池で、おそらく夕餉の魚を求めて網打つ家族の姿である。このささやかな漁を脅かさないことが、真の持続可能性でありヒトの新たな「発展」なのだろうと思う。これからの良き社会は、そのような価値観のもとで成立するべきである。

持続可能な良き社会を実現するためには、私のいう“佳い人”の存在が欠かせない。他人への配慮と理解につながる旺盛な好奇心を持ち、共存を是とする価値観を有する人たちである。経験則からすると、そのような人に成長するためには幼少期の自然体験が役立ちそうである。具体的にこれを証明せよという輩もおられるが、これは環境問題で使われる「予防原則」のようなものである。やらないよりやった方がずっとよいというくらいの感性で判断しても、間違っていないだろう。とはいっても、自然体験の効能ぐらいは考えておかないといけない。第1に、自然界では多様性に触れることができる。さまざまな生物とその生活、岩石や鉱物のいろいろ、地形や景観、天候や色、風や匂い、季

節の移ろいなど、自然のなかで出会う多様な事物・事象は、街住まいではなかなか発見できない。第2に、多様性はさまざまな好奇心への窓口である。この好奇心の延長が、私にとっては今の植物化石研究にもつながっている。同様に科学全般への興味が自然体験に起因している例は枚挙にいとまがない。好奇心は赤ん坊のときには危険なほど旺盛であるのに、歳を経るにしたがって不思議と衰えてきて、日本の大学生ではほとんど自発的に芽生えることがないのかと疑うほどに見えるのは哀しいことである。

第3に、自然のなかではヒトに備わっている五感が解放されることを、私自身は体験してきた。自然体験の重要な側面のもう1つは、この点である。

(中 略)

自然体験はあくまで個人と自然との間でのやりとりである。しかし、そのような個別の体験だけでは共通の社会的自然観は育たない。今後の社会の発展に寄与してほしい“佳い人”は、幼少時代の自然体験だけで必ず育つわけではない。好奇心にあふれた豊かな感性を持ち、知識を体系づけ応用できる思考力のある人でなければ“佳い人”にはなれないだろう。持続的発展目標のような概念は、未来社会のすべての構成員が理解し共有すべきものである。そこで社会教育が必要となる。自然界のさまざまな存在と現象を、知的興味にしたがって継続的に観察・記述し、後世に残そうとする人類の営みが自然史(誌)(Natural History)である。ヒトの好奇心を科学へと昇華させ、自然の成り立ちと歴史を解明し、ヒトの社会的共存、生物多様性と環境の保全といった現代的問題解決への総合的な提言ができるのは、自然史あるいは自然史科学だけである。この意味で、自然史は次世代の教育と知的成長とにうってつけの分野である。

(中 略)

自然体験は、今後のヒト社会において、持続可能性という概念が不可欠であることを理解してもらうための第一歩である。体験は、脳が発達を続けている小学生のころまでにできるだけたくさんあるほうがよいだろう。自然史教育はそのような体験をもとに、理想とすべき共存社会が求める人格や感性の形成を導く。

(西田治文「自然史——佳き人、良き社会への入り口」【UP】第541号、pp.6-11、東京大学出版会、2017年より、一部改変)

注1：2015年9月の国連サミットで採択された、持続可能な世界を実現するための国際目標。

注2：生きものたちの豊かな個性とつながりのこと。生態系の多様性・種の多様性・遺伝子の多様性の3つのレベルでの多様性がある。

問1 作者は、SDGsという表現におけるDevelopmentを、「開発」と訳すことに異を唱えている。その理由を100字以内で説明しなさい。

問2 二重下線部の作者の主張を、文中の言葉を使って説明しなさい。そのうえで、あなたの考えを、事例をあげて述べなさい(700字以内)。